

松嶋夜話 卷之下 36

〔原文〕本州千松島之中有御島一區

〔訓読〕本州の千松島の中に島の御する一區有り

〔原文〕島之南向有唐僧一山和尚親澤碑石

〔訓読〕島之南向に唐僧の一山和尚親澤の碑石有り

※一山和尚…不明

〔原文〕蓋山和尚昔年東渡唐僧中絶筆也

〔訓読〕蓋し山和尚は昔年東渡の唐僧の中の絶筆なり

※山…人名？

〔原文〕石崇七尺餘

〔訓読〕石の崇（たか）さ七尺餘

〔原文〕横三尺許

〔訓読〕横三尺許り

〔原文〕文字行草其一字幅二寸有希

〔訓読〕文字の行草其の一字の幅、二寸有希

〔原文〕筆力遒勁

〔訓読〕筆力遒勁す

※遒勁…書画・文章などの、筆勢が力強いこと

〔原文〕見者驚目

〔訓読〕見る者目を驚かす

〔原文〕有問訪僧謂余曰

〔訓読〕問訪の僧有り余に謂て曰く

〔原文〕此碑文逸于目今流行一山和尚語錄

〔訓読〕此の碑文、目を今流行の一山和尚の語録に逸らす

〔原文〕請舉之廣示法社教

〔訓読〕請ふ之を舉げて廣く法社に示せ

〔原文〕教見者結般若縁

〔訓読〕見る者は般若の縁を結ばしむる時は

〔原文〕則寔孔幸

〔訓読〕則ち寔に孔だ幸

〔原文〕余耳彼之言

〔訓読〕余、彼の言を耳きて

〔原文〕爲是欣而撮之

〔訓読〕是を爲して欣びて之を撮りて

〔原文〕不左文段始末

〔訓読〕文段の始末を左へず

※「左」…訓読よくわかりません

〔原文〕構寫系于此云

〔訓読〕構寫して此に系ぐと云ふ

〔原文〕銘序曰

〔訓読〕銘の序に曰く

〔原文〕巨福山建長禪寺住山唐僧一山一寧撰

〔訓読〕巨福山建長禪寺の住山、唐僧の一山一寧撰す

※建長寺…神奈川県鎌倉市山ノ内にある禅宗の寺院で、臨済宗建長寺派の大本山。正式には巨福

山建長興国禅寺と号する。

※一山一寧…元の渡来僧。俗姓は胡。台州臨海県の出身。寧一山ともいう。

〔原文〕徳治丙午冬予再居福山

〔訓読〕徳治丙午の冬、予再び福山に居す

〔原文〕丁未春有僧匡心孤運來禮謁言

〔訓読〕丁未春、僧の匡心、孤運というもの有り、來りて禮謁して言ふ

〔原文〕來自奥州

〔訓読〕奥州より來りて

〔原文〕手其師行實一通

〔訓読〕其の師の行實一通を手にし

〔原文〕炷香禮足

〔訓読〕炷香禮足し

〔原文〕謂予曰

〔訓読〕予に謂ひて曰く

〔原文〕吾郷奥州有松島

〔訓読〕吾が郷奥州に松島有り

〔原文〕其側有御島

〔訓読〕其の側に御島有り

〔原文〕有菴曰妙覺

〔訓読〕菴有りて妙覺と曰ふ

〔原文〕乃曩歲見佛上人結茆而居

〔訓読〕乃ち曩歲、見佛上人茆を結びて居す

※見佛人上…一〇〇〇年に大島に居を定め、孤独な仏教の修行をしながら少なくとも一〇年間過ごした。

〔原文〕見佛清苦精進

〔訓読〕見佛清苦精進す

〔原文〕身清嚴口緘黙

〔訓読〕身は清嚴、口は緘黙

〔原文〕日誦法華經先十二年中已滿六萬部

〔訓読〕日に法華經を誦すること、先十二年中に已に六萬部に滿つ

〔原文〕後至八十二入滅

〔訓読〕後八十二に至って入滅す

〔原文〕厭後所論又不可以數計也

〔訓読〕厭の後、論ずる所又た數を以て計るべからざるなり

〔原文〕六根既淨

〔訓読〕六根既に淨にして

〔原文〕能役使神物

〔訓読〕能く神物を役使す

〔原文〕靈異頗多

〔訓読〕靈異頗多し

〔原文〕道乃遍布

〔訓読〕道乃ち遍く布す

〔原文〕聲聞朝野

〔訓読〕聲朝野に聞く

〔原文〕適鳥羽院當宇賜本尊器物

〔訓読〕適たま鳥羽院の宇に當つて本尊器物を賜り

〔原文〕以旌異之

〔訓読〕以て異を旌(あらわ)す

〔原文〕其島本名千松島

〔訓読〕其の島本と千松島と名づく

〔原文〕以見佛承御賜之故時人乃易今名

〔訓読〕見佛、御賜を承るの故に、時人乃ち今の名に易ふに以て

〔原文〕凡松島左右列島僅百數

〔訓読〕凡そ松島の左右、列島僅か百數

〔原文〕獨此名最揚

〔訓読〕獨り此の名、最(もっと)も揚げる

〔原文〕蓋由見佛之故也

〔訓読〕蓋し見佛に由るの故なり

〔原文〕吾之師名頼賢號觀鏡房

〔訓読〕吾の師の名は頼賢、觀鏡房と號す

※奥州御島頼賢碑、重要文化財（古文書・古碑）一宮城郡松島町一瑞巖寺蔵

この碑は、徳治２年（1307）に松島雄島妙覚庵主頼賢の徳行を後世に伝えようと弟子30余人が雄島の南端に建てたものである。板状の粘板岩の表面を上下に区画し、上欄には縦横おのおの7.8cmに一条の界線で区切り、その中央よりやや上に梵字の阿字を大きく表わし、その右に「奥州御島妙覚庵」、左に「頼賢庵主行實銘并」と楷書で記してある。下欄には、縦1.083、横0.97mに一条の界線をめぐらし、その中に18行633字の碑文が草書で刻まれている。また、碑の周囲には雷文と唐草文、上欄と下欄の間には双竜の陽刻を配している。碑文は、松島の歴史を物語るだけでなく、鎌倉建長寺の10世で、唐僧の一山一寧の撰ならびに書になる草書の碑としても有名である。

〔原文〕生於本州源氏

〔訓読〕本州の源氏に生まれ

〔原文〕幼而悲愿

〔訓読〕幼にして悲愿す

〔原文〕父母俾出家

〔訓読〕父母家を出でしむ

〔原文〕乃依長崎成福寺爲童子

〔訓読〕乃ち長崎の成福寺に依り童子と爲る

〔原文〕十五薙髮而學天台及眞言教于講席

〔訓読〕十五に髮を薙（そ）り、天台及び眞言の教を講席に学ぶ

〔原文〕久之忽自悟

〔訓読〕之を久しうし、忽ち自ら悟る

〔原文〕謂文字之學非出世法

〔訓読〕文字の學は出世の法にあらずと謂ふ

〔原文〕至年四十二今圓覺無隱範和尚住松島圓福寺

〔訓読〕年四十二に至り、今圓覺、無隱和尚松島の圓福寺に住ず

〔原文〕往依之

〔訓読〕往きて之に依る

〔原文〕居弟子列

〔訓読〕弟子の列に居す

〔原文〕復遊方參聖一千東福大覺于建長佛源于壽福

〔訓読〕復た遊方して、**聖一千東福大覺于建長佛源于壽福**

※この訓読わかりません

〔原文〕孜孜請扣

〔訓読〕孜孜として請扣す

〔原文〕法無異味

〔訓読〕法に異味無し

〔原文〕仍回圓福將終老焉

〔訓読〕仍て圓福に回つて將に老を終へんとす

〔原文〕無隱遷相州淨妙

〔訓読〕無隱相州の淨妙に遷る

〔原文〕空巖慧和尚繼席

〔訓読〕空巖の慧和尚席を繼ぐ

〔原文〕適此庵乏主者

〔訓読〕適たま此の庵、主者乏し

〔原文〕空巖乃舉師以補之

〔訓読〕空巖乃ち士を舉げて以て之を補せしむ

〔原文〕既居歷年

〔訓読〕既に居して年を歷る

〔原文〕光大振興

〔訓読〕光大振興す

〔原文〕凡法社之未完者咸修備之

〔訓読〕凡そ法社の未だ完ったからざる者、咸之を修備す

〔原文〕口誦法華

〔訓読〕口に法華を誦す

〔原文〕心住禪寂

〔訓読〕心禪寂に住す

〔原文〕二十二年影不出山鬱爲叢社

〔訓読〕二十二年、影山を出でず、鬱として叢社と爲る

〔原文〕四衆攸歸人謂見佛上人之再世也

〔訓読〕四衆の歸する攸、人見佛上人の再世と謂ふなり

〔原文〕矧其天性慈和畝無畛畦

〔訓読〕矧んや其の天性の慈和、畝に畛畦無く

〔原文〕恃物如一

〔訓読〕物を恃するに、一の如し

〔原文〕清濬安恬

〔訓読〕清濬安恬

〔原文〕精勤不怠

〔訓読〕精勤怠らず

〔原文〕誠末法化物之儀軌也

〔訓読〕誠に末法化物の儀軌なり

〔原文〕世壽今八十二

〔訓読〕世壽今八十二

〔原文〕僧臘六十七

〔訓読〕僧臘六十七

※僧臘…僧侶の出家してからの年数。法臘。

〔原文〕居處如平居

〔訓読〕居處は平居の如し

〔原文〕時度弟子三十餘人

〔訓読〕時に弟子を度すること三十餘人

〔原文〕匡心孤運等以師之德之功不著于後

〔訓読〕匡心孤運等、師の徳の功を以て後に著けざるは

〔原文〕我之責也

〔訓読〕我が責なり

〔原文〕相與議立宰堵波

〔訓読〕相い與に議して、宰堵波を立つ

〔原文〕以紀之

〔訓読〕以て之を紀す

〔原文〕敢求數語以信于後

〔訓読〕敢て數語を求めて、以て後を信ぜしむ

〔原文〕予聆其語又覽其詞

〔訓読〕予其の語を聆(き)き、又た其の詞を覽す

〔原文〕因思

〔訓読〕因つて思ふ

〔原文〕古之立道場振法門者率由是道

〔訓読〕古の道場を立て、法門を振う者は、率(おお)むね是の道に由る

〔原文〕賢師其由是道乎

〔訓読〕賢師其れ是の道に由るや

〔原文〕贊寧師作僧傳

〔訓読〕贊寧師の僧傳を作る

※贊寧(さんねい)……中国北宋初の僧・仏教史家。俗姓は高氏。呉越の湖州徳清県の出身

〔原文〕有興福一科

〔訓読〕興福一科有り

〔原文〕賢師其在斯科乎

〔訓読〕賢師其れ斯の科に在や

〔原文〕既有補於法門

〔訓読〕既に法門を補する有り

〔原文〕故爲銘

〔訓読〕故に銘を爲す

〔原文〕之銘曰

〔訓読〕之の銘に曰く

〔原文〕人惟德馨地由人興

〔訓読〕人惟れ徳馨、地は人に由りて興る

〔原文〕御島之庵見佛始營

〔訓読〕御島の庵、見佛始めて営む

〔原文〕賢師後居

〔訓読〕賢師後居す

〔原文〕乃臻厥成

〔訓読〕乃ち厥の成るに臻る

〔原文〕清明勝靜

〔訓読〕清明勝靜

〔原文〕開迷醒醒

〔訓読〕迷を開いて醒醒

〔原文〕慈善根力克享脩齡

〔訓読〕慈善の根力克く脩齡を享く

〔原文〕弟子樹茲窅窅波

〔訓読〕弟子茲の窅窅波を樹て

〔原文〕紀其德行

〔訓読〕其の徳行を紀す

〔原文〕予爲銘

〔訓読〕予爲に銘す

〔原文〕是歲三月十五日書

〔訓読〕是の歲三月十五日書す

〔原文〕小師三十餘人匡心孤運同立石

〔訓読〕小師三十餘人、匡心、孤運同じく石を立つ

〔原文〕余曰此碑三百年来月更星移

〔訓読〕余曰く、此の碑三百年来、月更(あらた)めり星移り

〔原文〕苔蘚埋没

〔訓読〕苔蘚埋没し

〔原文〕無知字者

〔訓読〕字を知る者無し

〔原文〕寛文中玄先師遊方歸郷

〔訓読〕寛文年、中玄先師遊方し歸郷す

〔原文〕就于此頼賢庵舊址

〔訓読〕此の頼賢の庵の舊址に就て

〔原文〕新建松吟庵憩之

〔訓読〕新たに松吟庵を建て、之に憩いす

〔原文〕一日興碑彫苔涵墨

〔訓読〕一日碑を興し、苔を彫り墨を涵(うるお)して

〔原文〕待字之現

〔訓読〕字の現れるのを待ち

〔原文〕臨之油紙初讀銘辭從

〔訓読〕之を油紙に臨み、始めて銘辭を讀む

〔原文〕是此島改觀云

〔訓読〕是れ此の島觀を改むと云う